

技術・家庭（家庭分野）におけるボランティア活動の実践と意義について

山口 明美

要 旨

本研究は生きる力を養うこと、減少傾向にある授業時間数に対応するための授業展開の構築を図ることを目的とし、技術・家庭（家庭分野）の授業の中にボランティア活動の実践を導入した。その結果、以下の3点が明らかになったので報告する。

- ①活動を通して、協調性・協働性を体得し、社会に目を向けることによって問題意識の高揚と共生・共存の意味を認識するようになる。さらに社会の中での自分の立場を理解する機会となっていることから、社会性、豊かな人間性を育むことができることを確認した。
- ②総合的な学習形態をとることにより、ものづくりの学習、家庭、地域との関わりに関する内容を網羅でき、減少傾向にある時間数の中での効果的な学習方法と考えられる。
- ③中学生の時期の体験学習が将来の生き方の方向づけとなりうる。

以上の点から、今後の指導方法、指導形態を考える上でボランティア活動を実践する意義は大きいと言える。

キーワード：生きる力、ボランティア活動、達成感、共生、授業展開

I. はじめに

平成20年1月の中央教育審議会の答申を受け、新学習指導要領が発表され小学校、中学校、高等学校と順次施行されることとなった。その新学習指導要領の理念¹⁾として「生きる力」を育む（生きる力とは、知・徳・体のバランスのとれた力を意味する）が、これまでと同様継続されることとなった。

- ①基礎的な知識・技能を習得し、それらを活用して自ら考え判断し表現することにより様々な問題に積極的に対応し解決する力
- ②自ら律しつつ、他人とともに協調し他人を思いやる心や感謝する心などの豊かな人間性
- ③たくましく生きるための健康な体力

上記の3点は、学習指導要領の理念であるが、家庭科教育では以前から実践・体験活動と問題解決的な学習を通して、実践・自立できる個を育て、主体的な生活が展望できる力を育てることにより生きる力を育てることを目標としてきた。しかし、一方、子どもたちの現状は物質的豊かさと便利さの中で生活しているものの、家族形態の変化、家族関係の希薄化また人間関係が希薄²⁾なため、その中で学びあう、育ちあうチャンスが非常に少なくなっている。さらに家事参加に対する考え方も変化し、家庭で学ぶあるいは学習したことを家庭で確認やフィードバックする機会も減少していると言える。³⁾そこで、本研究では「生きる力を養う」を目的の一つとした。具体的には①自ら学び、自ら考え、よりよく問題解決する力を養う。②社会性・豊かな人間性を育む。の

2点である。第二の目的として、減少傾向にある授業時間数への対応である。現在、授業時間数の増加は望めない状態である中で、学すべき学習内容は同じであり、さらに選択履修の必修化などで内容は増加している現状である。

II. 研究方法

1. ボランティア活動を授業に取り入れ、生徒の活動状況と実施状況の分析

授業に取り上げられる題材はいくつか考えられる中で、ボランティア活動を取り上げた理由としてボランティアには以下の3つの要素⁴⁾が含まれると考える。

- ①心情の育成：生命、自然を大切にする心、自分を見つめる心、思いやりの心、助け合い協力する心、感謝する心
- ②福祉の理解：生命、自然に関する理解、健康と安全、社会生活、社会福祉の理念や社会保障制度の理解
- ③実践的態度の育成：自己を表現する力、住みよい環境をつくる力、社会生活の課題を解決する力、社会の一員としての役割を自覚し自主的に行動する力、ボランティアな精神をもって行動する力

以上のように、生きる力を統合的に育成する可能性を秘めているのがボランティア活動と考えられるので、授業に取り入れることとした。

施設訪問実施

ボランティア活動として施設訪問を実施した。条件は以下の通りである。

テーマ：“人々との出会い”

対象者：中学1年生（120名、3クラス）

時期：10月～12月（11時間）

訪問場所：乳児院，児童養護施設，肢体不自由児施設，知的障害施設，特別養護老人ホーム，養護老人ホーム

授業展開

授業展開は学校で活動する時間を11時間とし，以下の計画で実施した。

表1 ボランティア活動の授業展開

時間	生徒の動き	教師の動き
1	講演	講演者依頼
2	ボランティア活動の意義の確認 グループ作り、施設訪問場所の検討	生徒が申し出た施設へ依頼の電話・文書発送
3	プレゼント内容の決定と作製計画	
4	施設への依頼と打ち合わせを行う	
5	グループ作業（プレゼント作製）	計画記入用紙の準備
6	訪問実施内容・タイムスケジュールの決定	保険の加入
11	施設訪問報告会	記録文集作成

基本的に施設側との交渉，プレゼント作製，訪問のすべてを生徒主体で実施し，教師はあくまでもサポート役に徹した。保険の加入については「けが，及び賠償責任損害」（300円／一人）の保険に全員加入した。

授業実施前後の記録内容は以下の通りである。
実施前の記入用紙（A4サイズ）

表2 施設訪問の活動計画

グループ名			
訪問施設名		施設長名	
施設の概要		施設周辺の地図	施設までの 交通手段
訪問日時		集合時間・場所	
プレゼント内容			
訪問先でのタイムスケジュール（予定）			
終了解散時の報告者名			

実施前の記入用紙（A4サイズ）

表3 施設訪問実施後の報告

訪問計画について	
プレゼント作製の過程で	
訪問先で行ったこと	
活動を通して感じたこと	



実施記録文集

終了後，計画から実施までを振り返り，感じたこと・心の変化・学んだこと・今後の課題など項目別に記入させた。生徒の記録したものを文集として製本し，図書館に保管・管理を依頼し，生徒はいつでも図書館で閲覧できるようになっており計画などの参考として活用した。

2. 卒業生（体験者）を対象としたアンケート調査の分析

平成6年～平成10年までに体験した卒業生600名より，各年度から20名ずつアトラダムに抽出し合計100名にアンケートを実施した。平成10年実施の卒業生が，大学を卒業し社会人として活躍している立場から，本授業がどのように捉えられ，意識付けられているのかを確認できることを想定し，この年代を対象とした。

アンケート内容

1. 中学以前にボランティア活動をしたことがありましたか
2. 授業での施設訪問を通して，あなた自身周囲の人に対する関わり方が変わりましたか
3. 活動を通して，高齢者・障害のある方，乳幼児施設に対する見方が変わりましたか
4. 授業の中にボランティア活動を取り入れたことについてどのように思いますか
5. 中学1年という時期に施設訪問を実施したことは良かったと思いますか
6. この経験はあなたに影響を与えたと思いますか
7. 現在の中学生にも同様の経験をしてほしいと思いますか

Ⅲ. 結果及び考察

1 ボランティア活動を授業に取り入れ，生徒の活動状況と実施状況の分析結果

1. 実施記録の分析から，訪問施設の種類，訪問した施設数は以下の通りであった。
2. 準備したプレゼントの種類（布を利用した作品）
3. 体験感想の分析（平成6年～平成10年）
実施記録5年分を対象として，生徒の記述内容を分析

表 4 訪問施設の種類

	施 設 名	施設数
1	乳児院	5
2	児童養護施設	5
3	知的障害施設	2
4	肢体不自由児施設	1
5	盲学校	1
6	特別養護老人ホーム	4
7	養護老人ホーム	12

表 5 準備したプレゼント内容

乳児院・児童施設への作品	養護老人ホームへの作品
サッカーボール、 マジックテープつきボールと手袋 ぬいぐるみ、人形、 マスコット人形 ウォールポケット パズルのタペストリー 万年カレンダー、 クリスマスリース 音の鳴るボール、ガラガラ 布製絵本、触って読む本 点訳絵本、クッション、 紙芝居	万年カレンダー クリスマスツリー (パッチワーク) クリスマスリース クリスマスタペストリー チューリップの花束 お手玉、ことわざかるた (big 版) ランチョンマット、花瓶敷 巾着 劇、合唱、合奏、クッキー

表 6 体験感想の分析結果
(平成 6 年～平成 10 年実施分)

項 目	内 容	割合
実行したことからくる達成感・充実感	生徒主体ですべてを計画し行動できた。心が喜びへと変化するという喜びの体験	98.8%
準備段階における学び・充実感	心遣い、思いやる心、想像力を働かせることの大切さ。徹底した細やかな準備、心の準備をして行動することの大切さ。	59.5%
製作する喜びと充実感	面倒くさいという思いから喜びに変化。作る喜びや楽しさ、苦手意識がなくなるという体験。作品作りに心を込めることの大切さと喜び	59.5%
社会問題の認識と理解	共生・共存の必要性和大切さ。笑顔・心を育てることの大切さを学ぶ。バリアフリーの重要性や高齢者問題を認識する。	60.7%
自己意識の変化	偏見がなくなり、考え方、見方が変わった。社会に貢献できる人間になりたい。感謝の心で生活し家族とよく話すようになった。	65.8%

した結果、大きく 5 つの項目に区分できる。

2 卒業生（体験者）を対象としたアンケート調査の分析（回収率 96%）

中学以前のボランティア活動経験の有無を尋ねたところ、80%以上の生徒が経験をしている。しかし、単発的な活動にとどまり、その活動が広義での「社会性」に目覚めるまでに至っていない。

ボランティア経験者の活動内容として最も多かったのが、地域のごみ拾い、募金活動、養護老人ホームの訪問、清掃活動であった。

活動を通して周囲の人への関わり方が変わりましたかの問いに対しては、はいと答えた人が 78.4%、いいえと答えた人は 21.6%であった。また、活動を通して高齢者、障害者の方々などに対する考え方が変わったと答えた人が 89.2%、変わらないと答えたものが 10.8%であった。

良かった理由として、以下の意見があげられた。

- ①人間性が磨かれ、豊かになる
- ②自分の世界観が変わる
- ③奉仕の意義を知ることができる
- ④経験するチャンスができる
- ⑤達成感を味わう良い経験ができる

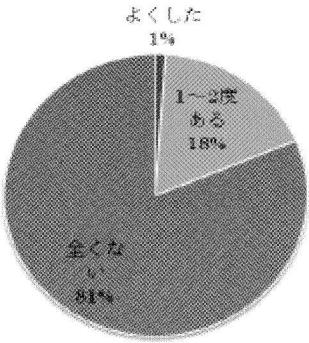


図 1 中学以前のボランティア経験の割合

なかには強制にならないように注意すべきだという意見も見られた。これについては、あくまでもボランティアは自主的な行為であるので、強制されているという思いを生徒が持たないで活動できるよう細心の配慮が必要である。これは教師になった卒業生からの意見であったが、本人が生徒に関わってみて、各々がそれぞれの感情をもっているのが当たり前であるので、このような方向性を持たせることは難しいと感じているのであろう。

影響を受けたと思う内容として、①自分の人格形成にプラスになった。②視野が広がり、世界観が変わった。

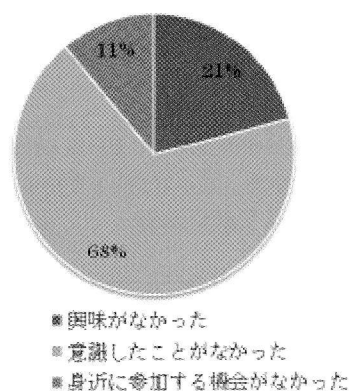


図2 中学以前に活動をしなかった理由

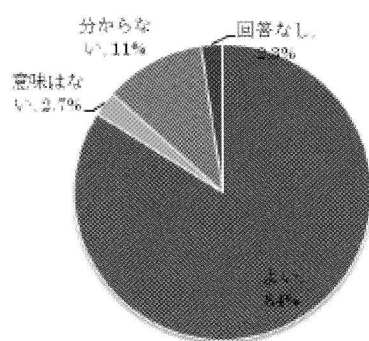


図3 施設訪問体験の自己肯定度

③生き方の指針となった。これは自己の将来像が明確化されたことを意味する。

現在の中学生にも同じ体験をしてほしいですかの問いに対して思うと答えた者が100%であった。

理由として①人間性が磨かれ、豊かになる。また、人格形成にプラスになるという考え方として、心の教育になる。感謝の心が芽生え育つ。相手を見つめることにより、自分を見つめなおす機会になると答えている。②視野を広げるチャンスにもなる。多感な時期に多くの人と接し、生き方を学ぶことは大切。社会の見方が変わる。現状を知ることにより、差別や偏見を持たないで関われる。③社会の一員としての意識づけとなる。社会に貢献する喜びを体験し学ぶことができる。ボランティア活動に積極的に取り組むチャンスとなる。

福祉教育には、1. 関心への水準 2. 知識の水準 3. 技術の水準 4. 態度の水準 5. 実行力の水準 6. 人柄の水準 7. 生き方の自覚の水準の7段階があるとされる⁵⁾。まさに彼らは本活動を通して、過程的に自己を高め、魂にめざめ、自ら人格を育み、人間としての尊厳性を樹立しているのである。

IV. まとめ

ボランティア活動を授業に取り入れた学習を通して、生徒たちは図1に示すように、高齢者問題、障害者の生

貴重な体験ができて良かった

授業でなかったら参加していなかったと思う

良い経験だったが、強制にならないよう注意すべきだ

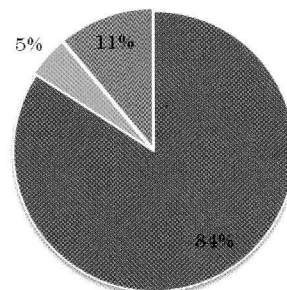


図4 ボランティア活動の授業導入受容度

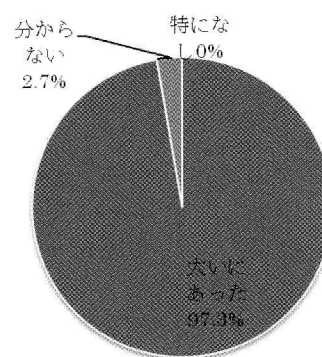


図5 施設訪問体験における自己認識への影響度

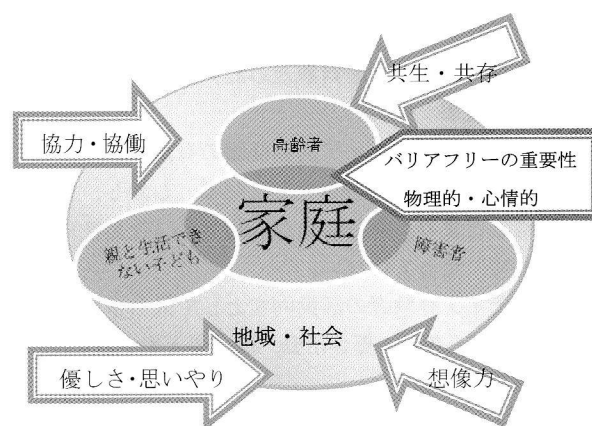


図6 家庭をとりまく諸問題とその解決のための行動原理

活援助問題、また親と生活できない子どもたちの問題は家庭を取りまく社会・地域に実存しており、これを個人、各家庭の問題として捉えるのではなく、社会全体としてどのように関わっていくべきかを考え、行動していくことが求められていることに気づいている。

具体的に社会を構成する一員として、連携する大切さ、何をなすべきか、またどのように関わるべきかを考え、行動する必要性を体得している。

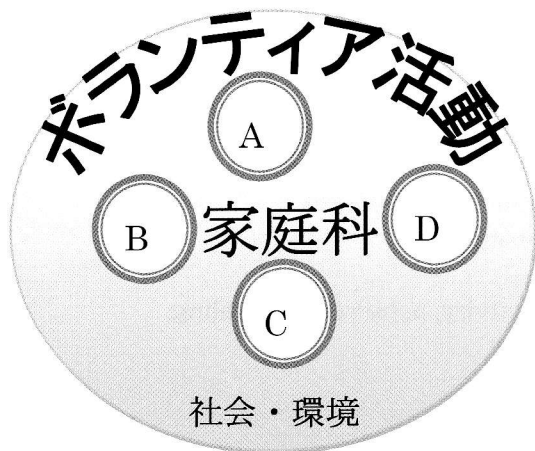


図7 家庭分野内容とボランティア活動との関係

行動を現実化するために、お互いに協力・協働すること、笑顔・優しさ・思いやりをもって物理的のみならず心情的にもバリアをなくすことが大切であることを体得していると言える。

本授業の活動に求められるものは、生徒たちが主体的に状況を把握し、自分で考え、造りだす能力。特に創造的な能力が求められる。その結果、個を活かし、自ら考え学び、社会の変化に対応できる能力が試されるのである。

本活動を通して、その能力が育まれ、学習指導要領の理念である“生きる力”は十分に養われていることが明らかになった。

まとめの第二点は、図2に示すように、総合的な学習ができるという点である。

新学習指導要領の学習内容区分を適用⁶⁾すると、家庭科の内容はA: 家族・家庭と子どもの成長 B: 食生活と自立 C: 衣生活・住生活と自立 D: 身近な消費生活と環境の4分野に分けられるが、ボランティア活動を実践するという一つの題材で複数の項目の目標を実現できると言える。

第三点は、本活動を通して家庭科に対する生徒たちの考え方が変化することにより、時間数不足を補うのに余りある結果を生むことができる点である。つまり“生きる”というテーマで家庭科を捉えるように変化した。これまで、受験教科でないため、特に真剣に考えなくても

よい教科として消極的な取り組みであったものが、生活の中心に位置付けられるようになり、その結果、以下のような変化が見られた。

- ①授業の取り組みが積極的・意欲的になった。
 - ②指示待ちから、自ら考え、工夫し意見を述べ、行動するようになった。
 - ③問題意識が高く、その問題解決のために自主的な調べ学習が増え、知識、理解が深められる傾向となった。
- これらの大きな変化は、密度の濃い授業をもたらす結果となった。

家庭科の時間数が減少していく中で、ボランティア活動のために11時間を充当することに対しての異議も覚悟の上で、本活動を他の領域と相互乗り入的に授業を構築することにより、不足分の時間を充足させることを視野に入れて試みた。しかし、結果から時間数の不足よりむしろ3年間の授業内容がより充実し、密度の濃いものとなることが明らかになった。

基礎学力、創造力をのばすため、確かな学力、自ら考え学び、社会の変化に対応できる能力の育成が必要不可欠である⁷⁾と言われて久しいが、この創造力と基礎学力の関係、その育成の実際についてはあまり検討されていない。その点からもボランティア活動を中学生の家庭分野に取り入れる意義は大きいと考えられる。

参考文献

- 1) 教育開発研究所編；中教審「学習指導要領の改善」答申；教育開発研究所，158～162，2008
- 2) 日本家庭科教育学会編；家庭科で育つ子どもたちの力，明治図書，23～24，2005
- 3) 山口明美；鹿児島純心女子大看護栄養学部紀要，Vol.12，33，2008
- 4) 伊藤隆二；日本福祉教育・ボランティア学習会年報創刊号，Vol. 1，1996
- 5) 宮川俊行；日本福祉教育・ボランティア学習会年報Vol. 4，26～27，1999
- 6) 文部科学省；中学校学習指導要領解説 技術・家庭編，38～40，2008
- 7) 祖父江孝男，梶田正巳；日本の教育力，金子書房1～9

About practice and meaning of volunteer work in the technical arts and Home economics (Home field)

Akemi Yamaguchi

Department of Nutrition, Faculty of Nursing and Nutrition,
Kagoshima Immaculate Heart University

Key words : Ability for lives, Volunteer activity, achievement feeling,
coexistence, class development

Abstract

Intended to power live support, to build class deployment for that corresponds to the number of class time to tend to the decrease of this research and technology and introduced the practice of volunteer in the class of the home (home field). As a result, because the following three points are clarified to report.

① By, and then acquired from cooperation, cooperation labor activities through to pay attention to the social uplift of issue awareness and meaning of symbiosis and coexistence to recognize that. You can bring up abundant human nature and society and opportunities in the community of their position to understand further that from.

② By taking a comprehensive learning form one possible and effective learning in the number of hours at the decreasing trend, comprehensive content about making learning, home, and regional relations.

③ At the time of the junior high school student experience learning becomes can can the direction of the future way of life

It can be said that greater meaning to volunteer practice in thinking about future guidance, guidance form from the above-mentioned points.
